

市民の手で文化のみえるまちづくり

姫路文連 ニュース

季刊 2012年 冬号

編集・発行

姫路地方文化団体連合協議会
(姫路文連)事務局

〒670-0935

姫路市北条口3丁目5

みどりビル1F (姫路労音内)

姫路地方文化団体連合協議会会報(第36号)



「ふるさとのうた」木版 1958年
24.3×21.0cm



「夜明け」木版 1970年 18.1×31.5cm



「蝶」木版 1963年 24.7×22.2cm

清宮質文

(せいみや・なおぶみ 1917~1991)

自己の内面を深く見つめる静かで純粋な詩的世界

第 47 回姫路文化賞受賞式

第 47 回姫路文化賞受賞式は、11 月 27 日 11 時半より、鹿島殿高砂の間で 100 名以上の参加者で盛大に開催されました。



第 47 回姫路文化賞は、柏山泰訓さん(地域文化)、中島妙子さん(文学)に受賞していただきました。

柏山さんは、「室津」を愛する会、活かす会を立ち上げ、地域力を高める活動行い、故郷づくりに取り組まれ、見事な実績を上げられました。

中島さんは、現代詩から文学の道に入れ、清新かつ知的な想念とイメージの広がりの中にしなやかな言語空間をもたらして注目されました。教育現場の真摯な実践と体験による作品は、感銘深い。

文化功労賞は、小坂佐紀子さん(俳句)、山部一翠さん(書)に受賞していただきました。

小坂さんは、戦後俳壇の巨匠森澄雄に師事され、人間存在の深みを追求した師の薫陶を受け、対象への湿潤な目配りと俳句の妙趣世界が反響を呼びました。

山部さんは、青年時代より一意専心、書の研究に没頭し、各地に教室を持ち指導、自由闊達でありながら古典に忠実の中に個性を強調され、見る人を魅了されています。

第 29 回黒川録朗賞は、上田早夕里さん(小説)、北川太郎さん(石彫)、野田祐子さん(音楽)、松下高文さん(ガラス工芸)に受賞していただきました。

上田さんは、第 4 回小松左京賞を受賞、プロ作家デビュー。宇宙へ未来へと、人類の変貌し得る姿、「種」としての行方に、豊かにして強靱な想像力を持って迫り世界を構築し物語をつくっておられます。

北川さんは、作品は、自然と近い距離にあり、「石」との対話から発生した独自の造形で、見るものの記憶を刺激する神秘的な力を持っています。

野田さんは、チェロの魅力に導かれプロの道へ。ハンディを持つ子と母のコンサートに毎年出演。朗らかで優しい人柄で、音楽の素晴らしさを広げ、技術と表現力を高める研鑽を重ねておられます。

松下さんは、ガラス工芸の専門的な技術を取得し、世界のガラス館に勤務。手間を惜しまず時間をかけてつる作品づくりのスタイルを確立されました。

受賞者の皆さんの、真摯な姿勢が、反映された素晴らしい会になりました。顧問の坂東先生からも、「文連らしい会になりましたね」と賞賛していただきました。

なお、上田さんは、後日、日本 SF 大賞を受賞されました。



茶座「いま・はりま」第6弾

文化のみえるまちづくりー地域からの発信ー

第3回 「一人、ひとりが地域の語り部」



9月6日、小栗秀夫さんに「一人、ひとりが地域の語り部」と題してお話しいただいた。サブタイトルは「播磨ため池回廊ミュージアムからみえてきたもの」。小栗さんは同会で活動されるほか、明石で観光ガイドもされており、播磨地域の歴史にたいへんくわしい。講演の資料もボリュームたっぷり、北条直正、河野鉄兜、大谷亮吉、高島華宵など、二時間の枠ではとても紹介しきれないぐらいで、歴史の奥深さ、おもしろさ、先人が積み重ねたものの重みをあらためて実感させられた。

第4回 「文化によるまちづくりー嶋屋を例にしてー」



10月4日、「御津めて室津観光ガイド」代表の柏山泰訓（やすのり）さんにお越しいただき、「文化によるまちづくりー嶋屋を例にしてー」という演題でお話しいただいた。古くから港町としてさかえた室津は、江戸時代に西国大名の参勤交代でにぎわい、海沿いには本陣・脇本陣が何軒も建ち並んでいたが、現存するものはわずか。そのひとつである嶋屋を海駅館として保存、文化発信の拠点とする取り組みに柏山さんは尽力。立派な体裁、内容の会報「むろのつ」をめぐるエピソードにもふれられた。

第5回 「町家ーまちなかの暮らしと文化」

11月1日、本年度の茶座最終回は、兵庫県立大学教授で、姫路・町家再生塾塾長の志賀咲穂（さくほ）さんに、「町家ーまちなかの暮らしと文化」と題してお話しいただいた。姫路は戦時中の空襲により古い町並みの大半が失われたが、城の北西部や野里の界隈には古い町家が残存している。その一軒を借りて住んだ体験をふまえたお話は興味深いものであった。



今回のシリーズは、われわれの日々のいとなみもふくめた文化というもの、先人の残してきたものと無縁につくられるものではないことに、あらためて気づく機会にできたのではないだろうか。

千田草介

東日本大震災復興支援文化展「連」



未曾有の大惨事となった東日本大震災。「現地で活動されている文化に携わる人たちに直接支援を届けたい」その一心で呼びかけた東日本大震災復興支援文化展「連」。

ギャラリー・ルネッサンススクエアの香山さんのご好意で会場を提供していただき、多彩なジャンルから60人の作家の皆さんが作品を出展してくださいました。

9月27日～10月2日の開催期間中、300人を越える参加者で会場は賑わいました。

寄付金や会場募金、売り上げ含めて、102万円を11月5日に一般財団法人「アーツエイド東北」の代表理事の志賀野桂一氏に届けることができました。

この支援展「連」の中心的な役割を担ってくださった三輪さんに感想を寄せていただきました。



復興支援文化展「連」について

ひめじクラフト・アートフェア実行委員 三輪周太郎

3月11日の震災以降はメディアを通して被災地の現状を知り、何も出来ない自分に苛立ち、落胆しそれがまた痛みとなり心の隅に小さな傷をいくつもつけていた気がします。

多くの人がそのような立場に立ったでしょうし、出来る範囲で立ち向かったと思います。

私も何が出来るだろうか思案しました。物をつくる仕事に携わる自分に出来ることはなんだろうか？

そんな時に復興支援文化展に小坂会長から誘われた事で人との関わりや支援のあり方を改めて示して頂いた気がします。復興支援文化展での「アーツエイド東北」への寄付は目的がはっきりしていただけに声をかけた作家からも快く参加の承諾をいただきました。

同じ立場にある人への支援に少しでも関わられた事は自身の歩を強めるきっかけにもなりまし、目に見えない絆を感じられる文化展でした。

「続けてきたのは歌うこと、愛すること、そして人生を味わうこと」

12月4日3時半頃、山電姫路駅前前は混雑していた。そう、山陽百貨店7階のキャスパホールで、播磨地方でも比類なき歴史を誇り、かつ実力ナンバーワンの呼び声高いフォークソングバンド「ひとつ山こえてみよう会」のコンサートが開かれるのだ。それも通常のコンサートではない、記念すべき結成30周年の大コンサートなのだ。

老若男女が次々とエレベーターに乗り込んで行く。おっと、ボクも遅れてはいけなぞ、ギューギュー詰めに無理やり乗り込む。乗り合わせた人達の目は早くも期待と興奮で輝いていた。

7階に到着した。何ということだろう。チケットもぎりに長蛇の列。キャスパホールがこ

れほど混雑しているのも珍しい。客席内に入ってまたもやビックリ。ほぼ満席ではないか。外に居る人たちが入ってきたら立ち見確実！。さすがに人気バンド、すごい動員力だ。

そして午後4時、そのコンサートは始まった・・・。

客席の300名以上が咳きひとつしないので一曲目を待っている。そしてリーダー守谷さんの歌声がホール全体に響き渡ると客席に緩やかな空気が流れだした。その後、次々と繰り出される名曲の数々に、リズムをとる人、笑顔で歌詞を口ずさむ人、感動して大粒の涙を流す人など、それぞれが、それぞれの形でコンサートを味わっている。これこそ長い歴史を積み重ね、多くの人々と絆をつくってきたものだけがつくれるコンサートなのだ。

終了後、出口のところでバンドメンバーと抱き合っていて感動を伝えているファンの姿に、改めて30年の重みを感じるのだった。 加茂田陽一

Bunren Reports V

文連望年会リポート

姫路文連の「ボウネンカイ」と音は同じだが、忘れるのではなく次への年に望む思いをもった「望年会」は、年末の大切な企画でもある。12月16日（金）午後6時半から、山陽電車・夢前川駅の近くの「さとや」で行われた。会場となった「さとや」さんは、魚屋さんでもあり、新鮮な魚介類魚を中心とした料理や鍋を囲んでの楽しい会となった。他にもお客さんはいたが、みんな同じ釜の飯状態で祭りの乗りを彷彿とさせていた。参加者も老若男女20人を越えた。今回は姫路クラフトアートフェアの若いメンバーの参加者も多くあり、一味違った集いになったのではないか。姫路文連等が呼びかけて行われた東日本大震災復興支援文化展「連」での、出会いと言うか結びつき、繋がりの大さを強く感じた。明確な支援先を示してのチャリティー展の絆は、この望年会にも連なっていたのではないか。先を夢見での集いは、2012年の姫路文連の活動にどう波及していくのか、自らが出来る範囲で無理しないで動くことで、一齣進められたと感じられた。

二次会は姫路文連の事務局次長の加茂田さんの自宅への闖入と相成った。盛大にもてなしてもらい加茂田ご夫婦に迷惑をかけましたが、話の花は咲きに咲いたように思います。筆者は眠りこけていたので詳細は不明でしたが、夢前川の川面を照らす外灯が印象的でした。

大西 隆志

Bunren Reports VI

第4回「播磨国音舞台」コンサートに参加して

姫路労音 太田垣清治

2011年12月25日（日）網干市民センターにて、毎年恒例となった音舞台コンサート。播磨が生んだ若手邦楽演奏家、利根英法さんを中心に毎年行われてきて4回目を終えた。利根さんがいないのは 本当にさみしかったが、演奏者30人、裏方20人、聴衆300人が一体となって作り上げた、素敵な演奏会でした。

友情出演の大正琴の演奏で始まり、トーン・チャイムのきれいな音色で心があたたまり、そして、利根さんの同級生6人「琴七星」と田辺頌山の共演。本来なら涙・涙の演奏会になるところだが、出演者のみなさんが天国の利根さんに響けと心のこもった演奏を披露。演目ラストを飾ったのが、利根さんのために作られた「相生の町」。本当に感動し、涙を流さずにはいられませんでした。そこに利根さんの姿がうつしだされ…。利根さんが作り上げてきたもの、仲間を大切にしていきたいものです。